



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 294 号)

「教育者・新島襄」 -11- (最終回)

貿易立国から技術立国へ

井上勝也先生 (同志社大学名誉教授)



今号で井上勝也先生の「教育者・新島襄」は終わります。

これは、同志社創立百周年にあたり、創立者新島襄を記念して 1979 年開設された事業の一つで、1987 年 11 月 7 日に新島講座の第 8 回東京公開講演会が有楽町朝日スクエアで開催されました。そこでの講演をベースに後刻、手を入れられたものです。

井上勝也先生は冒頭、「本日、私は教育学を研究する者として、「教育の先達新島襄」ということで、新島の教育者の面に光を当ててお話し申し上げたいと思います。」と話されて、次の内容で「教育者・新島襄」として語られました。それを「同志社ファン・レポート」にご投稿いただき、次のような区切り方で連載させていただきました。

1. 畢生の事業
2. カルチュア・ショック／フィリップス・アカデミー
3. アーモスト・カレッジ／内村鑑三のアーモスト・カレッジ体験
4. 森有礼少弁務使のアンケート
5. W.クラーク博士
6. アーモスト・カレッジの特質／岩倉具視遣外使節／宣教師就任
帰国・同志社英学校開設
7. 自責の杖事件

8. 同志社大学設立の趣意書
9. 教育者 新島襄／熊本バンドの入学／人間の偉大さ
10. 卒業生の新島回想／新島の遺言

今号は「貿易立国から技術立国へ」と題した内容です。しかし、お話になったのは今から 33 年前の 1987 年 11 月 7 日です。

◆ 貿易立国から技術立国へ

3 年にわたって審議が続けられました臨時教育審議会は 1987 年 8 月に中曽根首相に答申を提出しました。首相が戦後の総決算として我国の教育を見直し、21 世紀に向けて教育の在り方をさし示すことを求めました理由は、21 世紀に我国が現在の国際競争力を維持し、発展するためには是非とも大きな教育改革をなし遂げることが歴史的必然であると考えたからであります。即ち、現在我国が貿易立国から技術立国へと産業構造を 180 度転換しようとしているのは、既に貿易立国では 21 世紀に生き残れないとの判断からであります。アメリカやヨーロッパ共同体諸国との貿易摩擦は限界に達しています。韓国や台湾からの追い上げが益々厳しくなるでありましょう。そのような状況の中で、日本が現在の国際競争力を維持し、21 世紀に飛躍するためには、先端技術分野の開発を大々的に進め、技術を輸出する技術立国に転換しなければならないのです。

我国の歴史は 7 世紀の遣隋使、遣唐使の時代から、16 世紀後半、幕末・明治の時期及び第二次大戦後今日迄の 40 年間、ひたすらに先進諸国の文明を模倣し、それに追いつくことに努力して参りました。21 世紀に向けての我国が世界をリードするためには、この追いつき型、模倣型近代化を終了し、創造型、先進型に転換をせまられているということでありま

す。臨教審の教育改革の強調点は「個性尊重」であります。個性や自発性の尊重は我国の伝統的な「覚える」教育から「考える」教育への転換を意味いたします。そして今後「創造型」、「先導型」の文化を支える国民は、これまでの「服従型」から「自立型」、即ち自らで意志決定をし、行動に移すタイプの人間であることが求められています。このようなコペルニクスの転換は決して容易ではなく、日本人の意識及び能力の変革を求める教育改革がもし失敗したり、或いは 50 年もかかるようであれば、21 世紀の我国は現在の世界的地位を他国に譲り、斜陽化の一途をたどる運命が待ち受けているでありましょう。

20 世紀の残された 12 年と 21 世紀の始めは益々技術革新が進み、政治・経済・軍事面で国家の覇権が移行する激変の時代になりましょう。今世紀に入って世界経済を支配し、政治的にも軍事的にも世界の覇権を握っていたアメリカが現在財政・貿易赤字に苦しみ、世界一の債務国からの脱出の方途が見出せないために、世界の指導力を失いつつあります。

ソ連も革命後 70 年の歳月を経て、共産主義国家がかならずしもバラ色の理想国家でないことをソ連人自身が認識し始め、ゴルバチョフ書記長は多くの国内的矛盾を解消し、膨大な軍事費を削減して国民の生活要求に応えようとする大改革（ペレストロイカ）に着手しました。先進諸国はともにこのような激変の時代を乗り切るために英才教育に力を入れ、能力主義を助長しています。我が同志社の創立者新島襄は「自治自立の人民」の育成、いわば先導型、創造型の人間の育成を 121 年前に開始いたしました。彼は学生の個性を尊重しました。しかし彼は「教室で一番劣った学生に特別の注意を払う」教育者でもありました。

今後我国の教師がもたねばならない視点は、大きな世界の動きに関心を示し、且つ如何にして生徒・学生の個性を尊重し、創造性（creativity）を伸ばしていくかということと、如何にすれば脱落者をつくらないかということでありましょう。これは極めてむづかしい問題であります。この点について新島襄の教育者としての生き方から学ぶ点が多いことを申し上げまして、私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

<井上勝也先生のプロフィール>

所属：同志社大学 文学部 文化学科教育学専攻

職名：名誉教授

学位：文学修士（同志社大学）

研究キーワード：教育学，比較教育思想，キリスト教教育思想

研究分野：教育学 / 教育史

経歴：

1961 年－1965 年 同志社大学文学部文化学科教育学専攻助手

1965 年－1969 年 同志社大学文学部文化学科教育学専攻専任講師

1969 年－1978 年 同志社大学文学部文化学科教育学専攻助教授

1978 年－2004 年 同志社大学文学部文化学科教育学専攻教授

1990 年－1993 年 広島大学大学院教育学研究科修士課程非常勤講師

1996 年 大阪市立大学大学院文学研究科博士前期・後期課程非常勤講師

学歴：

1958 年 同志社大学 文学部 文化学科

1967 年 同志社大学 大学院文学研究科 哲学および哲学史専攻修士課程

委員歴：

1995 年－2002 年 日本国際教育学会 理事

2000 年－2002 年 関西教育学会 理事 研究紀要編集副委員長

Societas Philosophiae Doshisha 評議員

1991 年－1997 年 教育文化学会 会長

2000 年－2002 年 日本国際教育学会 副会長

賞：

1981 年 『留岡幸助著作集』全 5 巻の編集委員として毎日出版文化賞を受賞

2017 年 瑞宝中綬章 受章

書籍等出版物：

『新島襄 人と思想』 晃洋書房 1990 年

『国家と教育－森有礼と新島襄の比較研究－』 晃洋書房 2000 年

『日本の近代化と人間形成』の中 新島襄 法律文化社 1984 年

『図説人物海の歴史』9 の中 新島襄-密航 日本の近代化のために 毎日新聞社 1979 年

『同志社百年史』通史編 I の中 新島襄の教育理念,同志社大学設立運動 同志社 1979 年

『J.H.シーリー教授』 同朋舎出版 1989 年

『国家与教育-森有礼与新島襄』邁向 21 世紀的国際理解教育-国際教育学研究大会蘇州会議
論文選 江蘇教育出版社 1995 年

『留学生 比較国際教育学』 東信堂 1996 年

「パブリック・スクール」小野修編『イギリス文化と国際社会-海洋国民の知的エネルギー』
pp.121-143 明石書店 1996 年

『現代語で読む 新島襄』（現代語訳及び編集委員） 丸善 2000 年

所属学会：

関西教育学会，教育哲学会，日本国際教育学会，日本比較教育学会，教育史学会，
Societas Philosophiae Doshisha，教育文化学会，Canadian Society for the Study of
Education

放送：

・新島襄を語る と題してラジオ放送。

(NHK ラジオ第 2 放送、1992 年 1 月 5,12,19,26 日 11:15～12:00a.m.)

・こころの時代－新島襄の求道の生涯 と題して語る。

(NHK 教育テレビ 1993 年 7 月 11 日(日) 7:30～8:30a.m.)

論文 1：

ペスタロッチーの教育立国論 「文化学年報」 1968 年

ペスタロッチーにおける社会改革と基礎陶冶 「哲学論究」 1964 年

ペスタロッチーの宗教観 「人文学」 1965 年

ルソーとペスタロッチーの社会観 「パイディア」 1963 年

論文2：『新島研究』に掲載された主な論文（数字は号数、近年順にリストアップ）

情報源：<https://archives.doshisha.ac.jp/publication/neesima/new.html>

- | <号数> | <論文名> |
|------|---|
| 110 | 新島襄は強い人であった |
| 109 | 新島襄の米欧教育視察 |
| 107 | 新島襄研究上の疑問点 |
| 106 | 新島七五三太は何故国禁を犯して密航を企てたのか |
| 105 | 山本覚馬と妹八重 |
| 104 | 山本覚馬と新島襄Ⅲ |
| 103 | 山本覚馬と新島襄Ⅱ |
| 103 | 森中章光先生を語る |
| 101 | 山本覚馬と新島襄Ⅰ |
| 100 | 湯浅与三と魚木忠一の新島襄伝 |
| 098 | 新島襄とオーティス・ケーリの学んだアマースト・カレッジ
—歴代学長のプロフィール・伝統と当時のカリキュラム— |
| 097 | 新島襄の学んだニューイングランド、
フィリップス・アカデミーと当時のカリキュラム |
| 097 | 【書評】太田雄三著『新島襄』を読んで |
| 088 | 新しい『新島研究』の刊行について |
| 083 | 新島襄の大志 —日本の近代化のために— |
| 077 | 森中章光先生を憶う |
| 076 | 新島襄先生の生涯から学ぶ |
| 073 | 高梁が生んだ社会事業家留岡幸助先生と新島襄先生 |
| 071 | 強い同志社人に—新島襄の生涯を通して考える |
| 064 | ホーム・ステイしたヒドウン家及びミスヒドウンについて |
| 065 | アモスト大学再訪記 |
| 063 | 函館時代の新島襄 |
| 059 | 新島襄の教育思想（安中・前橋講演） |
| 053 | アルフュース・ハーディ 人と生涯 |

以上